

バスケットボール中に大腿骨外顆の軟骨剥離及び 外側半月板損傷をきたした症例

○森本 時光, 米谷 泰一, 田中 美成, 塩崎 嘉樹, 堀部 秀二

大阪労災病院 スポーツ整形外科

今回、比較的稀な大腿骨外顆の軟骨剥離及び外側半月板損傷をきたした症例（12歳男性）を経験したので報告する。

【現病歴】

バスケットボール中、ジャンプした際人とぶつかり、バランスを崩して着地時左膝を捻り受傷。左膝の可動域制限をきたし、近医受診、当科紹介となった。受傷後15日の当科初診時には、左膝関節可動域は-40～130度と制限され、加重をかけての歩行は困難であった。レントゲンでは異常所見なく、MRIにて、大腿骨外顆の軟骨欠損および顆間窩に陥頓した遊離軟骨片を認めた。

【手術所見】

大腿骨外顆軟骨損傷および外側半月板損傷の疑いにて、受傷後16日目に手術を行った。大腿骨外顆は軟骨損傷（軟骨片は遊離、顆間窩に陥頓）を認め、外側半月板は中～前角部にかけてやや変形した縦断裂をきたしていた。遊離片（18×22mm）は直視下にneofix pin（Gunze, 直径1.5mm, 長さ15mm）5本で固定、外側半月板はzone specific（Zimmer）を用いて関節鏡視下に5針縫合した。

【考 察】

成長期においては、関節軟骨層の組織は未成熟であるため、膝に強いせん断力が加わると、軟骨層で剥離すると考えられる。レントゲンでは診断できないため、若年者では本外傷を念頭にMRIを撮影すべきである。教科書的には遊離軟骨片は整復固定しても癒合しにくいとされているが、8年前に遊離軟骨片を固定した症例が現在も問題なく経過しており、積極的に行うべき術式である。